

# 10代の母という 生き方 ⑦

大川 聡子

## 出産後の社会的不利との対峙

### — 気の置けない仲間と関係性を再構築する過程 —

#### ★問題と目的

若年母親は青年期でありながら、子どもを生き育てるという生殖期の課題に直面します。そのため、青年期の課題であるアイデンティティ形成に困難が生じると考えられます。

田間(2001)は、ある個人が、「女性」というアイデンティティを持ち、それが個人にとって重要なアイデンティティである場合、その個人は自己の重要なアイデンティティを維持するためという理由によって母性を主体的に内面化しやすい。その結果として、逸脱を自己の責任とし、統制を主体的に受け入れやすいと述べています。若年出産した母親達においても、統制を受け入れて母性を内面化し、自らの生活や行動を、母親としてあるべきものに変容させたのでしょうか。若年母親となることを選択する行動力を持つ彼女達が母親として行動する理由は、統制を受けたこと以外にもあるのではないかと考えました。

若年母親は、「予防」すべきものであるとされ、児童虐待などのリスクと見られていることから、他者からの承認を得ることは容易なことではありません。若年母親は青年期にあることで、母親としての自己認識を形成する上での困難だけでなく、地域社会からの承認を受けることへの困難という、二重の困難に直面します。若年母親が持つ出産前、出産後の社会的に不利な状況については前号に書きましたが、これらの社会的に不利な状況に、

若年母親はどのように対峙しているのでしょうか、また若年母親のピアサポートはどのような影響を及ぼしているのでしょうか。

今号からは、若年母親グループにおけるインタビューから、出産後に顕在化する社会的に不利な状況に対峙するための、ピアグループなどの友人を含めたインフォーマルサポートの機能について明らかにしたいと思います。

## ★対象と方法

研究協力者は、A市において若年出産した母親を対象に行われているグループ「B」の参加者です。筆者はこのグループにおいて、200×年5月、8月に参加者15名(延べ20名)を2グループに分け、半構成的質問紙を用いてグループインタビューを行いました。内容は、妊娠から出産までの周囲の関わり、母親になったことでの変化、サービスの活用、支援の有無等です。グループインタビューは筆者とグループ「B」のスタッフである助産師、保育士と保健師経験のある大学教員の4名が各2名ずつグループに入り、司会進行を行いました。母子分離できる子どもたちは別室で「B」スタッフが保育を行いました。

分析方法は、質的記述的研究とし、インタビューデータの意味を解釈しながら内容ごとに分類し、コード化しました。分類したものを、徐々に抽象度を上げながら、カテゴリー別に類型化を行いました。作成されたカテゴリーを1. 若年の出産に至る背景要因、2. 母親としての心理社会的課題の表面化、3. 母親としての自己認識形成と社会行動の変化、の3項目に着目し分析を進めました。インタビューの対象者は、出産時の年齢順に事例1からA、その後B、C、D、E、F、G、H、I、J、K、L、M、N、Oとしました。

なお、本研究の質的データの内容とカテゴリーの整合性については、第3者である社会学、心理学、看護学分野の研究者から評価を受け、加筆修正を行ないました。

倫理的配慮として、研究への参加は自由意思に基づくものであり、参加協力を断った場合も不利益を被ることがないことを説明しました。面接の内容は、調査協力者の許可が得られた場合に録音し、個人名や地域が特定できないよう配慮しています。面接調査の実施時間、実施場所については、対象者の住居近隣とし、生活への支障がないよう配慮した。本稿は、大阪府立大学看護学部研究倫理委員会において承認を得ました。

## ★インタビュー結果

分析した結果を、カテゴリー別に記す。以下、サブカテゴリーを【 】、コードを《 》または〈 〉で表す。

## 1. 出産後の社会的不利の誘因

### (1)【学校からの離脱】

インタビューに回答した若年母親の中で、中学校に「行ってへん」と答えた人が複数いました。中学卒業後は普通高校や定時制高校などに入学しますが、退学した人は、夏休み明けなど1年生で中退している人が多いです。中退した理由としては「遊びたかったから」、また校則違反により「辞めさせられた」と答えた方や、妊娠を機に退学を選択した方もいます。

#### 〈友達とつるむ方が楽しい〉

Gさんは、中学校時代はあまり学校に行かず、友人と家でゲームをして遊んでいることが多かったと言います。

Gさん 中学校の時？遊びまくってた(笑)。

司会 何して遊ぶの？

Gさん えー、別に何することもなく、友達といるだけやけど。

Iさん つるんでんのが楽しいねんな？

Gさん そう。中学校の時はそれが楽しいから。よく、朝とか起きてんのは起きてんねんけど、学校に行かんと、友達でゲームしてたりとか。ずっと毎日そんなん。

こうした状況から、Gさんの母親が学校に呼び出されたこともあったのですが、親からは「学校に行け」とは言われなかったそうです。教師も学校に何度も誘ったが、Hさんが言うことを聞かなかったため、最後には「(教師も)もう諦めとった」と話していました。

#### 〈レベルの低いクラスメイトと合わない〉

Kさんは、高校に進学する意欲が乏しく、友人が行くからという理由で進学を決意したものの、周囲のクラスメイトと合わず、授業を受けて帰る、というだけの高校生活だったと言います。グループにおけるKさんは、積極的に発言し、人とコミュニケーションをとることが苦手な様子はみられませんでした。

Kさん 高校な、なんかあの、行っても行かんくてもどっちでもよかったから、めちゃ簡単に卒業したかったから、あほな学校行ってんやん。もうめっちゃ一番低いレベルの。なんかとりあえず友達行くから、みたいな感じで行ったら、周りがアホすぎておもんなかってんやん。何て言うんやろ。頭飛んでるやつが多かった。

### 〈妊娠したことによる退学〉

中学校の時は家に帰らず、学校にもあまり通っていなかったという B さんは、高校に進学してから家に帰り、学校に通うようになりました。その後は朝から夕方まで働き、夜は定時制高校に通い、高校が終わったら遊びに行く、という生活を繰り返していたと言います。しかし妊娠のため、半年で高校を退学せざるを得ない状況になりました。

B さん 高校の時は真面目やったで。

司 会 学校とかも毎日？

B さん うん。定時やん。朝から働いて、夕方まで働いて、ほんでから、学校来てしてたで。

C さん 若いからできたんやて。

B さん そやな。今なんて、B んち 10 時就寝やからな。(学校)半年で辞めたけど。チビできたから。

### (2) 【金銭的自立を迫られる】

若年母親達の中には、高校生のところからアルバイトで長時間働き、得たお金を家計に入れたり、自分の学費に充てている人が多かったです。このことから、若年出産した母親の両親の雇用が不安定であったことが読み取れます。家計に入れる以外のお金は、免許取得や遊興費に使っています。

### 〈アルバイトで家計を助ける〉

D さん お父さんが仕事辞めたから、その分、自分で払う分は全部自分で払って、っていうのがあったから。払わなあかんかったから。

司 会 家計にっていうか？

D さん そうそう。そっちにやって。で、残りは全部遊んで(笑)。でも、車の免許取るために貯めたりはしとったけど、(子ども)ができて、まあ、何かいろいろと使った。

### 〈学費は自分で賄う〉

G さんは、高校の学費を自分で賄うよう親に言われたため、アルバイトで賄おうとします。しかし、学校自体に興味を持てなかったため、学費を賄う意味を感じられず、高校を中退しています。

G さん 高校行ってた時は、親に「高校行きたかったら自分で学費出し」って言われとったから。バイトしながら学費出して。「おもんないのに何で学費払わなあかんねん」ってなって。で、辞めて。お金なんか、全然、貯金とか考えてなかった。(略) 10 万円以上稼いでも、余る月とかなかった。あるだけ使って。

### (3) 【夫の同意が得られない出産】

#### 〈夫が同意しなくとも子どもは産む〉

妊娠した10代の女性達がすぐに出産を決意しても、同意する夫ばかりではありませんでした。しかし、夫が同意しなかったとしても、彼女達は一人で出産したいという思いを持っています。

Bさん どうせ一緒に住む気やってんから、「まあえっか」言うて。でも、旦那はびっくりしてたから、嫌がってたけどな。だから、「別に、覚悟決まらんのやったらいらん」って言ったもん。

Cさん 同じこと(私も)言った。

Bさん 「別にいいよ。どっちでも」って。

Cさん 「迷ってんのやったら、ええ」って。「1人で産むから」って。

Mさんは、当時交際していた男性と別れてから妊娠が発覚しました。男性に妊娠を報告すると、墮胎するように言われたそうです。そのためMさんは、墮胎するために病院を受診したのですが、胎児のエコー写真を見て、「これはもう、おろしたくない」と思い、出産を決意しています。男性からは墮胎するよう勧められましたが、Mさんはそれに従いませんでした。このことから、夫との関係よりも、自分の体の中に子どもがいるという身体感覚を優先し、出産を選択していることが分かります。

司 会 最初妊娠分かった時に、すぐ産みたいってなった？

Mさん 思ったけど。彼氏と別れてから発覚したから。言ったら、もう「おろせ」って言われとって。で、おろすつもりやって。病院行って、エコー見た瞬間、もうこれはもうおろしたくないと思って、産んだ。

司 会 旦那さんも、もうその時は産んでくれって？

Mさん 産んでくれっていうか、「おろしてくれ」の一点張りやった。

Lさん 勝手に産んでんな？(笑)

司 会 でも、説得したっていうか。

Mさん 説得したっていうか、もうなんて言うか、もう生まれへんちゃう、おろされへん状態になっとったから。「勝手に産むわ」みたいな。で、もう一切。

## 第2項 出産を動機づける原家族との距離感

### (1) 【出産の動機付けとなった原家族の様相】

#### ① 《親からの自立》

Kさんは夫との交際をきっかけに何ヵ月か家出をした後、夫と共に生きていくことを決め、実家を離れ夫との生活を始めました。Kさんにとっては、夫との交際や妊娠が、親から自立するきっかけとなっています。

Kさん もう（家に）帰らへんわって自分でわかったから、家出、ただの家出じゃないなあって自分で思ったから、（親に）言って、「もう帰れへんから、この人やと思うから」。それで、旦那の地元に来て、今に至る。

司会 一緒にいたかったから、家に帰らなくなった？

Kさん だから、仲良くなってから結婚までがめっちゃ早かった。だから1年半くらい？2年くらいか？知り合ってから。

#### ② 《出産を後押しする家族》

若年出産する母親の家族は、一度は出産に反対しても、最終的に本人の意思を尊重し、積極的に支援する家族が多かったです。

##### 〈経済的に支援する親〉

Bさんは父と再婚した継母の下で育ち、継母とは不仲だったため、父親と母親がいる家庭に憧れていたと言います。別居していた母親も、家出して4ヵ月たってもBさんと連絡を取っておらず「ほったらかし」だったそうです。ですが、Bさんの妊娠に最初に気づき、受診を勧めたのは父親でした。妊娠を父親に告げた時、Bさん自身は「一人でも産む」つもりでしたが、父親が経済的に援助することを約束してくれました。そのことにより、夫に楽な気持ちで妊娠したことを話すことができたと言っていました。

Bさん すごい、お父さんとお母さんがいててとかって、家庭にはすごい憧れてて、でももしそれが、旦那が「もう、無理や」って言うんであれば、「一人でも産む」って、父親に言った時に「そうか」って普通に言われて、「いいよ」って、「俺が働いたる」って。それから「おまえは別に育ててたらそれでかまへん」って言われて。でよかったと思って、すごい楽な気持ちで旦那に（妊娠した）話はできた。

##### 〈母親の願いを叶えるための出産〉

Nさんの母親は癌と診断された際に「孫の顔が見たい」と言い、そのことでNさんは出産を決意したと言います。父親も当初は出産に反対したのですが、出産後は子どもを可愛がってくれているそうです。

Nさん 自分の親がなんか、癌とかなって。ほんで「孫の顔見たい」って言われたから。もし、その死んだ時って言われたから、「ああ、しゃあない」と思って産んでしまった(笑)。

司 会 もう親のために。

Nさん そう。ほんで今も生きてるから「おい」みたいな(笑)。

Dさん 反対されへんかったん？

Nさん おかんは、もう。だから、おかんがその病気なとって。おとんはもう多少反対はしたけど。産まれたらこっちのもんかな、みたいな。今はべったり。

### 〈親の若年出産〉

また、出産する母親の家族自身も早婚である場合もあります。Gさんの場合は、親が早婚であり、Gさんが交際中から「孫が見たい」と言っていたそうです。友人も妊娠後の結婚が多かったことから、妊娠後の結婚に抵抗が少なかったと言います。Dさんも同様に、Dさんの母親の出産年齢が若かったことを語っていました。

Gさん 妊娠する前から、両方の親が「早く孫見たい、見たい」言ってる。だから別に、子どもできて結婚する人もおったし。子どもできたら籍入れたらいいや、そんな感じだったから。子どもできて籍入れて、両方の親は「できた」って言った時も、めっちゃ喜んでたし。

司 会 お母さんとかって、その時まだ若かったんじゃないですか？

Gさん お母さんは、自分の親が40で、相手の親も42くらい。若いおばあちゃん。ずっと「孫見たい、見たい」って。

Iさん 珍しいよな。でも。反対せえへんって。

Gさん 両方の親が若い時に。10代とか20代とかに産んでるから。

複 数 ああー。(略)

Dさん うち、お姉ちゃん生まれたん(母親が)20歳とかそんなもんやもん。

## (2) 【妥協できない母親役割】

### ① 《家族に頼れない子育てのプレッシャー》

両親が離婚後、主に祖母に育てられ、母親との関わりが少なかったというIさんは、双子の弟妹がおり「甘えることを知らへんから」と幼少時から母親に甘えることが少なかったと言います。母親については「親だけど親じゃない」と語り、育児をしていく上での不安を相談したこともありませんでした。そうした不安は夫にも理解されず、Iさんは、育児の相談相手が誰もいない状況でした。また、周囲から「若い(母親だ)からできないだろう」と言われることに反発し、さらに母親としてのプレッシャーも感じ、自分1人で育児をこな

そうと努力していました。その結果、自分のような思いはさせたくないと、余計に子どもに手をかけてしまう状況にありました。

Iさん なんか、若くして結婚してて、周りも誰もおれへんやんか。そんで言える人もおれへんし。やっぱり「若いからできひんやろ」って言われるのがすごいイヤやった。(略)もう自分のプライドと、なんか責任感の。なんて言うん、重いやんか。子どもが産まれたら。そういうので、もうめっちゃ必死やった。

## ②《原家族における母親役割を踏襲する》

Kさんは、原家族における母親像に自分を近づけようと努力し、夫に自らの父親を投影し、自分の母親と同じように振る舞うことで家庭を維持しようとしていました。

Kさん うちの実家が、めっちゃ、ご飯ちゃんとせなお父さんがうるさかったから。旦那もそう思ってるかなって。

Kさんの夫自身は、食事についての要望があるわけではありません。しかし、Kさん自身が食事を気かけ、料理に時間をかけていました。その結果、生後2ヵ月の子どもを抱えたKさんは、睡眠不足となり、疲れをためていました。若年出産したことのプレッシャーと、実母に近づかなければならないというプレッシャー、さらに日々の育児がKさんを追い詰めている様子が見られました。 〈つづく〉

\* プライバシー保護のため、データを一部改変しています